

「バロック市計画」とヨーロッパおよび海外植民地における展開についての研究

山田 耕治¹、渡辺 千尋²

¹ 正会員 日本工営（株）チーフプランナー、(株)黒川紀章建築都市設計事務所 代表取締役
(102-0073 東京都千代田区九段北1丁目14-6) E-mail: yamada-ko@n-koei.jp

² (株)黒川紀章建築都市設計事務所 設計部
(102-0073 東京都千代田区九段北1丁目14-6) E-mail: cwatanabe@kisho.co.jp

本研究では、17世紀のヨーロッパで生まれたバロック都市計画の成立過程およびヨーロッパにおける展開を整理した上で、その後のヨーロッパ諸国への伝搬過程を明らかにした。さらに、ヨーロッパ列強による海外植民地における適用事例について調査した。その結果、バロック都市計画が17世紀のイタリアとフランスで発生し、その後イギリス、ドイツやオーストリアで展開され、さらに19、20世紀のイギリスやフランスの海外植民地および独立後のアメリカ合衆国において、実践されるにいたる過程が明らかになった。

Key Words : Colonial, Baroque City Planning, Boulebard, Rome, Paris, Rangoon, Phnom Penh

1. 研究の背景と目的

バロックとは17世紀のヨーロッパで確立された美的な概念である。バロックは絵画や彫刻、音楽に広がり、さらに建築や造園、都市にまでその影響を及ぼした。バロックの概念を取り入れた都市計画の方法をバロック都市計画と呼ぶ。

本研究では、17世紀イタリアおよびフランスで発展したバロック都市計画について概観し、その特性をあきらかにし、ヨーロッパの代表的な適用事例を概観する。さらにヨーロッパ列強による海外の植民地で、宗主国が主導して建設された植民地の行政やサービスを担う都市（植民都市）の都市計画への事例を概観する。こうした作業により、植民都市の都市計画における宗主国の都市計画手法の影響を把握する基礎を固めることとする。

本研究の対象期間は、17世紀から、多くの植民地が独立を果たす20世紀中ごろまでとする。

2. 研究の方法

本研究では、まず17世紀末から18世紀にかけてのイタリア、フランスにおける都市計画の潮流を文献により明らかにし、ヨーロッパにおけるバロック都市計画の発生とその特性を整理し、その後のヨーロッパにおけるバロック都市計画の展開を概観する。さらにヨーロッパ列強による海外植民地のなかで、バロック都市計画の適用事例を抽出し、その展開過程について検討する。

3. バロック都市計画の概念

本章では、ヨーロッパにおけるバロックの概念およびバロック都市計画の成立の過程を概観する。

(1) バロックという概念

バロックとは「ゆがんだ真珠」という意味のポルトガル語に由来し、16世紀後半に宝石関係の技術用語として使われるようになった¹。バロックという用語は当初、奇妙で気障りな考えを表現するための形容詞として使われた。比喩の意味を与えられたのは、1740以降の「フランスアカデミー辞典」においてであり、「バロックとはまた比喩的に、不規則、風変わり、不均等の意味に用いられる、バロックな精神、バロックな表現、バロックな形姿など」としている²。

バロックという用語を建築に対して適用した例としては、1788年の「百科辞書体系」が次のように記載している。「バロック、形容詞。建築におけるバロックとは風変わり（ビザール）の一異種である。それは風变りの洗練されたものといってよい、またその濫用ともいえる。…バロックという観念は、過度にまで推し進められた滑稽さの観念を伴う。」³

こうしてバロックという用語は、奇妙さを言い表す形容詞から、風変わりであっても洗練された表現や形姿を言い表す比喩的な言葉となり、さらには建築をとらえる言葉となったのである。

バロックはルネッサンスの否定と捉えられることが多く、円や正多角形などの図形を基本とするルネッサンス的な円満な世界から離脱することを意味している。バロックについて陣内秀信は、「美しく均整のとれたプロポーションで調和と秩序を獲得したルネッサンスの芸術表現に対して、（バロックは）動的な形態や光と色彩の演出によって人々の感覚に働きかけ、感情を揺さぶるもの」⁴としている。また、松岡正剛は、「バロックは、

神のいる宇宙のなかで、その宇宙像を限界いっぱいまで変更しようとしたうねりだった」⁵としている。つまりバロックには人間の感性に訴える特性があり、いわば表現主義的な側面が認められる。

芸術運動としてのバロックの時代について、タピエはマニエリズム（1530 - 80 年ころ）の後⁶、すなわち 16 世末に始まり、1780 年ころに消滅する⁷としている。

(2) バロック都市計画

「都市の文化」の中で、ルイス・マンフォードはバロックが 17 世紀になって、バロックの生活様式、バロック平面（プラン）、バロック庭園やバロック都市のうちに表現されるに至ったと書いている⁸。続けてマンフォードはバロックが相反する二要素を包含しているとした。

「二つとは、第一にバロックの厳格な道路プランや形式的な都市計画、幾何学的に秩序づけられた庭園デザインの中で完璧に表現されている数学的、重商主義的、方法的な側面である。それと同時に、他面、…バロックはその衣服、性生活、その宗教的狂信主義（ファナチズム）や気違いじみた経世の策に表現されている官能性、反逆性、反古典性、反機械性などの面を含んでいる」とした⁹。バロックの都市への適用について陣内秀信は「建築が街路や広場と一体となって生み出す集合的な空間」¹⁰をその重要な要素と考えた。

時代については、芸術運動としてのバロックとは切り離した議論がなされるケースが多い。マンフォードは、バロック都市計画を植民地以外で計画的に建設されたマンハイム、カールスルーエ、ポツダムなどに典型的にみており、その期間を 16 世紀から 19 世紀としている¹¹。また日端は、つぎのようにバロックとバロック都市計画の時間的な相違を述べている。「建築のバロック芸術の時代は主に 16~18 世紀であるが、バロックの都市計画はそれと関連しながら、17 世紀ころから 20 世紀前半に広がっている」¹²。すなわち、バロック都市計画は、バロックの終焉と言われる 18 世紀末を越えて、19 世紀あるいは 20 世紀前半に及ぶという見方がある。なお 19 世紀から 20 世紀初頭のバロック的な要素を強くもつ都市計画を、「プレ・モダンの都市改造」と呼ぶ例もある¹³。

4. ヨーロッパにおけるバロック都市計画

(1) イタリアにおけるバロック都市計画

1) シクストゥス5世に始まるローマ改造

バロック都市計画の端緒は 16 世紀末に時代をさかのぼる。時のローマ教皇であったシクストゥス 5 世¹⁴は、ヴァチカン図書館（1587-89 年）などの建築を完成させ、さらに世界中の司教にローマ訪問を義務付けた。広い道路によって教会と広場を結び、いくつもの広場にオベリ

スク¹⁵を建て、多くの噴水に水を絶やさない、というローマ改造を行った。これらの道路は起伏のあるところに建設されたため、かならずしも透視画のような完璧な風景を現出しているわけではないが、教皇の建築家・技師であったフォンタナ¹⁶は街路の両端にモニュメントを配置して、遠くからでも目的地が視認できるようにした。フォンタナは、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂からサンタ・クロチェ・イン・ジェルサレンメ聖堂にいたるおよそ 3km の直線道路、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂とラテラーノのサン・ジョバンニ大聖堂を結ぶ道路、そしてラテラーノとコロッセオを結ぶ道路などを設計した¹⁷。

2) ポポロ広場とモニュメント

ローマの北側におかれたポポロ広場もバロック都市計画の空間形成の典型的な事例である。北からくる巡礼者の目印となるように、シクストゥス 5 世は 1589 年、この広場にオベリスクを建てた¹⁸。もともと二本の道路が交差していた広場に道路を一本加える計画を作ったのはライナルディ¹⁹であった。三本の道路が作る二つの角地に、同じくライナルディの手によってサンタ・マリア・デイ・ミラーコリ聖堂（1675~79 年）とサンタ・マリア・イン・モンテサント聖堂（1662~75 年）という瓜二つの双子の教会堂が建てられた（図 1）²⁰。

3) ベルニーニのサン・ピエトロ広場

イタリアンバロックを強烈に印象づけた壮大なスケールの作品の一つが、イタリア・バロック建築の巨匠ベルニーニ²¹の設計によりローマのサン・ピエトロ大聖堂に併設されたサン・ピエトロ広場（1656 ~ 67 年）である。4 列の列柱廊が支えるコーニスには 140 体の聖人像が飾られ、列柱に囲まれた広場の中央にはフォンタナが設置したオベリスクが立つ（図 2）。広場はミケランジェロが設計した大聖堂ドーム（1590 年完成）の前面にバロックの空間造形を持つ楕円の広場を追加し、大聖堂と広場が一体となり、壮大で象徴的な都市空間が生まれた²²。

4) イタリア国内各地への展開

ローマで確立されたバロック都市計画は、その後もトリノやヴェニス、レッチェ、ナポリなどの都市で展開されていく²³。



図1 ローマのポポロ広場（北側の三叉路）²⁴

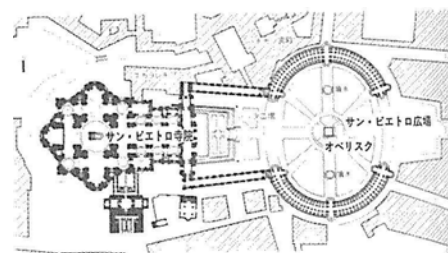


図2 サンピエトロ寺院（左）に繋がるサンピエトロ広場、中央にオベリスクが立つ²⁵

(2) フランスにおけるバロック都市計画

1) 都市軸整備の始まり

パリの都市計画において、上述したローマでのバロック都市計画の展開に触発され、長い期間に渡って実施されたのがセーヌ川に沿ってパリを貫く都市軸の整備である。まっすぐに見通すことができるという意味で視軸、ヴィスタとも呼ばれる、この都市軸をたどってみるとルーブル美術館からチュイルリー庭園、コンコルド広場を経てエトワール広場の凱旋門まで、さらに郊外に向けて伸び、セーヌ川を渡るヌイイ橋と対岸のデファンス地区の新凱旋門アルシュに至る(図3)。この都市軸は、歴代の王や皇帝、大統領が少しずつ作り上げたものである。

17世紀中ごろのフランスはルイ14世²⁶の治世を迎える。この時期にルーブル宮の改造が、ル・ヴォー²⁷のマスタープランに基づき進される。ルーブル東翼の建物設計では国際建築コンペが開催され、イタリアからバロックの巨匠ベルニーニほかの著名人が参加するが、結局はペロー²⁸による列柱棟(コロナード)が建設された。

ほぼ時を同じくしてルーブル宮に隣接するチュイルリー庭園の改造が行われる。チュイルリー庭園は、建設当時イタリア式庭園であったが、1664年、宰相コルベールはル・ノートル²⁹に庭園の大改造を依頼した。この中で、ル・ノートルは宮殿中央からの視線を重視し、園地の中央部にまっすぐな大通りと円形の広場を作った。さらにこの大通りに繋がるように、ほとんど農地がばかりが広がっている郊外に榆の木を2列に植えた並木道(チュイルリー通り)を設けた。これが後にシャンゼリゼ大通りになる道である(図4)。

2) ヴェルサイユ宮殿・庭園の造営

ルイ14世は1660年ころ、パリ郊外のヴェルサイユにあった城館を改修することを考え始め³⁰、これが本格的に始まるのは1668年のことである。

ヴェルサイユで目をみはるのは、整然と幾何学的に構成された庭園である。中央に幅広の園路が伸び、そのところどころに円形や長円形の広場が設けられており、広場からは放射状に園路が発している(図5)。こうした造園技法は、フランスではバロック様式と呼ばれ、中心をヴィスタ(視線の軸)が貫く構成をもっている。

3) 都市軸の貫通

ルイ14世の死後、後を継いだルイ15世(在位:1715-1774年)のオーストリアとの講和を記念した騎馬像をいただく広場の建設の構想が持ち上がり、王はチュイルリー宮殿の先、シャンゼリゼ通りとのあいだの土地を広場のために提供すると約し、王の第一建築家ガブリエル³¹に設計が委託される。ガブリエルの案は、広場の外側を堀で囲み、建物は北側のみにとし、見通しのよい構

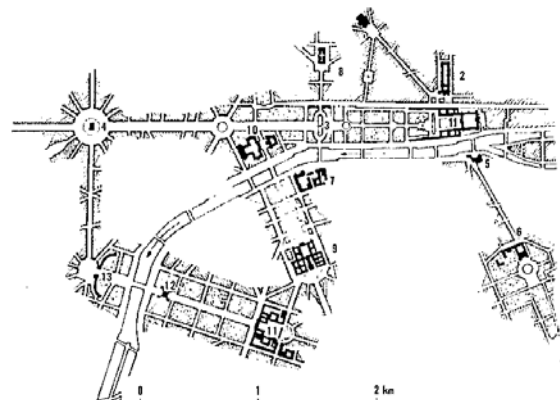
成とした。広場には1773年、壮麗なルイ15世の騎馬像が置かれ、後に、フランス革命に際して騎馬像は引き倒され広場は「革命広場」と改名されたが、革命後は「コンコルド広場」と改名された。

コンコルド広場の整備が進んでいたころの1770年、ルイ15世の建築総監であったマリニー侯³²は、シャンゼリゼ大通りを西に延伸し、セーヌ川を渡るヌイイという場所に橋を架け、その先はシャントコックの丘まで延伸した。ここが現在のデファンス地区³³である。

フランス革命の後に皇帝となったナポレオン1世³⁴は、パリにエトワールの凱旋門を建造した。凱旋門が立っている広場は星(エトワール)のように12本の放射状の道路が繋がるラウンド・アバウトで、その中央に凱旋門が立っている(図6)。その場所は、パリの都市軸であるルーブルからコンコルド広場を経てシャンゼリゼ大通りの先にある。凱旋門は1806年に着工されたが、30年以上の後の1838年によく完成した。

4) 19世紀の都市計画

19世紀には、ナポレオン三世はオースマンをセーヌ県知事として迎え、1852年から20年弱のあいだパリ改造が行われる。パリ改造は、無秩序な市街地を整理して道路を通し、都市内の道路網を整備し、パリを美しい町として生まれ変わらせることになった。



(1 ルーブル宮殿、3 コンコルド広場、4 凱旋門、9 アンバリッド(廃兵院)、12 エッフェル塔、)

図3 パリの都市軸とノード³⁵



図4 ルイ14世時代の
チュイルリー庭園³⁶



図6 凱旋門の立つシャルルド
ゴール・エトワール広場³⁸



図5 ヴェルサイユ宮殿と庭園
(1668年)³⁷

(3) イギリスにおけるバロック都市計画

1) 17世紀のロンドンとロンドン大火

ローマで始まり、パリで大規模に展開されたバロック都市計画は、ロンドンの都市計画にも影響を及ぼす。

17世紀のロンドンにはまだ市壁があり、ロンドン塔からテムズ河を半円形に囲んでいた。17世紀中ごろになると、市街地は市壁を越えて広がった。住宅の多くは木造で、表通りには商店が立ち並び、その後背地には大邸宅と最下層の貧民住宅が併存するような状態が作られた。

こうした中で、1666年9月2日未明のロンドンの大火が起きる。大火は市壁の中の建物を舐めつくし、さらには市壁の外にまで延焼した。市壁に囲まれた部分の5分の4が延焼し、13,200の家屋が焼失した。

大火から約1週間後、オックスフォード大学の教授で王室建築副総監であったレン³⁹がロンドン再建プランを策定し、国王に提出した。レンの計画は、もともとの道路網を生かしながらも、東西に新たな幹線道路を通し、また焼失したセント・ポール大聖堂のところに道路を一本新設し横向きのY字のように分岐させ、全体を幾何学的に仕上げた(図7)。大火前にはテムズ河の河岸には道路がなく建物が水辺まで建て詰まっていたが、レンは河岸に広い道路(中央に緑地帯があるブルーバール)を書き入れている。

レンは大火以前にローマを訪れており、サンピエトロ広場などを設計したベルニーニに心酔していた。レンの再建プランの要素はグリッド(格子状)の道路と市門を起点とする放射道路、長方形の広場など、バロック都市計画の影響を強く受けた構成となっている⁴⁰。当時のロンドンの複雑な土地所有などもあり、この再建プランの骨格となる道路の建設は簡単には実現しなかったが、セントポール大聖堂の再建はレンの手によって大火後約10年を経た1675年に着工、1711年に竣工した。

2) 19世紀の都市計画

大火からの復興したロンドンが発展し、19世紀になると人口90万人に達した。市街地はシティからあふれ、西側のウェストエンドに広がった。新しい市街地では、ナッシュ⁴¹が手掛けたリージェント街の開発(1825年)や、ナッシュの着想をもとにバリー⁴²が設計し、1845年に完成したトラファルガー広場などが目を引く⁴³。これらにもバロック都市計画の影響が感じられる。

(4) ドイツにおけるバロック都市計画

1) ベルリンのウンター・デン・リンデン通りの整備

ベルリンはプロイセンやドイツ帝国の首都を経て現在ではドイツの首都であるが、もともとは小さい町でしかなかった。ベルリンの発展は15世紀初めにフリードリヒ1世がこの地に王宮を構えてからである。王宮はシュ

プレー川の西岸、すなわち現在の博物館島側に置かれた。

1647年、城壁に囲まれた王宮の角のあたりから西に向かって、後にウンター・デン・リンデン(菩提樹の下、の意味)通りとなる並木道が敷設される。西側にはティア・ガルテンと呼ばれる広大な狩猟場の森があり、この並木道は町と森を繋ぐもので、並木は菩提樹と栗の木を交互に片側に3列に並べたものであった(図8)。

2) フリードリヒシュタットの広場

ウンター・デン・リンデン通りの北側はドロエーテン・シュタットと呼ばれ、1674年に格子状の道路が計画されると、新市街地として城壁に囲まれた旧市街地からあふれ出た貴族や上級市民の建物が次々に建設されていく。

さらに、通りの南側の地区にもフリードリヒ・シュタットと称される新市街地が作られる(図9)。通りを挟んで北側のドロエーテン・シュタットと南側のフリードリヒ・シュタットを貫くように、南北にフリードリヒ通りが設けられ、南北方向に5本、東西方向に15本の道路によって区分された格子状の新市街地が形成された。

1701年にはプロイセン王国が成立し、ベルリンはプロイセン王国の首都となる。フリードリヒ・シュタットの建設も進み、その最西端に3つの広場が造られるのだが、その形は、北から四角、丸、八角形とそれぞれ特徴的な幾何学図形である。これは17世紀のパリに作られた四角(王宮広場)、丸(ヴィクトワール広場)、八角形(ヴァンドーム広場)の広場の影響がみられる⁴⁴。

またフリードリヒ・シュタットの最南端に設けられた円形のロンデール広場(図10)は、この広場から3本の道路が鋭角の放射状に出ていくという形状からみても、ローマのボポロ広場を意識したものと思われる。

18世紀中ごろプロイセン王となったにフリードリヒ大王(フリードリヒ2世、在位1740-86)は、バロック都市・ベルリンを造るうえで重要な役割を果たした。王はウンター・デン・リンデン通り沿いの城塞を取り払い、自分の名前を冠した広場を造り、広場に面してオペラ座(現在のドイツ国立オペラ)を着手させ、1743年に完成している。フリードリヒ広場は、その後オペラ座広場と名前を変え、戦後ベルリンが東西に分断されたあとは東ベルリンの中心をなす広場となった。

このように、18世紀のベルリンの都市形成は、バロック都市計画の先行事例であるローマやパリの影響を受けながら進められていった。

3) カールスルーエ

マンフォードは、「都市の文化」のバロック・プランについての記述で、16世紀から19世紀のあいだに建設された新都市は、君主とその宮廷の恒久的所在地として選ばれた「居城都市」であるとし、その例としてドイツ

のマンハイム、カールスルーエ、ポツダムを挙げている。

カールスルーエはドイツ西部バーデンの首都であった。1715 年、バーデンの領主カール・ウィルヘルムがこの地を狩猟の根拠地と定め、居城の建設を開始し、その周りに都市を開発した。カールスルーエのプランは都市全体が王の居城を囲み、それを中心に道路が放射状に広がっている (図 11) ⁴⁵。

(5) オーストリアにおけるバロック都市計画

1) ハプスブルクの都ウィーン

もともとはスイスの領主であったハプスブルク家のルドルフ 1 世 (在位 1273-91) が 1273 年に神聖ローマ帝国皇帝となり、スイスからウィーンに拠点を移した。これによりウィーンは、13 世紀末から 1640 年にもおよぶ「ハプスブルクの都」となった。

市街地の西の端に位置する王宮は、ルドルフ 1 世の治世において王宮として整備され、その後 18 世紀中ごろの女帝マリア・テレジアの時代に、ほぼ現在の形になった。以降 20 世紀初頭に帝国が崩壊するまで、ハプスブルクの居城であった。

王宮にはおよそ 16 もの建物があり、その建設年代も 13 世紀から 20 世紀までとさまざまであるが、その設計者にはオーストリアのバロック建築を代表するヒンデブラント⁴⁶やフォン・エルラッハ⁴⁷の名前もみられる。18 世紀に描かれた絵 (図 12) では、王宮前広場とそれを取り囲むように建設された建物が透視図法的に鳥瞰され、背景にはシュテファン大聖堂の塔が見え、ビスタ (視軸) を活かしたバロック的な設計意図が見える。

2) ペストの災禍と記念碑

ペストはヨーロッパで何度も猛威をふるったが、17 世紀末に近い 1679 年にウィーンを襲ったペストは死者 3 万人を出す惨事となった。レオポルト 1 世は、災禍が収まった後の 1693 年、当時のウィーンでもっとも賑やかだったグラーベン通りに、フォン・エルラッハらが参加して記念碑が竣工された (図 13)。大きな幅員の道路の先に大きな記念碑という構成はバロック的である。

5. バロック都市計画の海外・植民都市への適用

ヨーロッパ列強による海外植民地化は、15 世紀末のコロンブスによるアメリカ大陸発見、ヴァスコダガマによる喜望峰を経由するアジア航路の開拓を契機に始まり、当初はポルトガルとスペインが、その後 17 世紀初めからオランダとイギリスが、さらに 19 世紀中ごろからフランスやその他の諸国が参加した。海外の植民地はアフリカ、アジア、南北アメリカおよびオセアニアに及んだ。これらの植民地においては、植民地経営などの目的で植民都市が多く形成されており、その中には現在に至る都

市もすくなくない⁴⁸。

本章では、前章でみたヨーロッパにおけるバロック都市計画が、宗主国を通じて海外の植民都市において実践され、都市建設に応用された事例を分析する。

(1) アメリカ合衆国ワシントン DC

海外の植民都市にバロック都市計画の方法が適用された初期の事例の一つは、イギリスから独立直後に首都として計画されたアメリカ合衆国ワシントン DC であろう。

1790 年、首都所在地法が成立し、ワシントン初代大統領はポトマック河畔を首都の場所として選定した。1791 年 9 月、この新しい首都は、大統領に敬意を表してワシントン市と名付けられた。

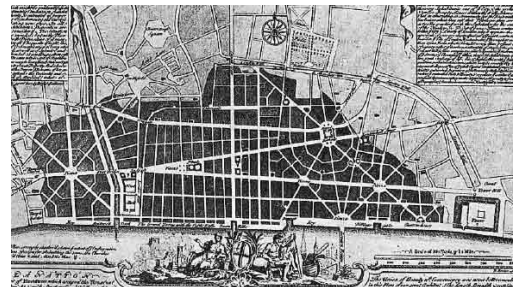


図 7 レンのロンドン再建計画⁴⁹



図 8 ウンター・デン・リンデン通り⁵⁰

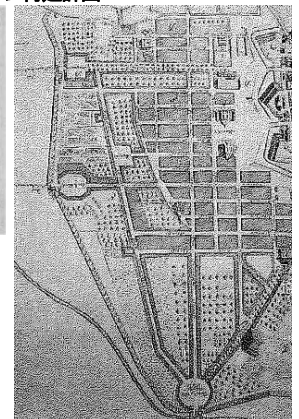


図 9 フリードリヒシュタットの円形のロンデル広場⁵¹

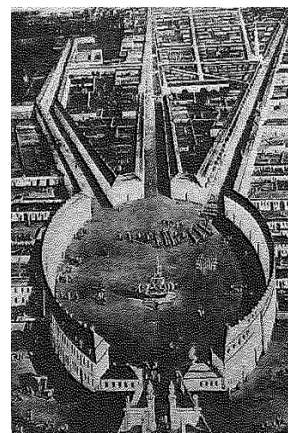


図 10 フリードリヒシュタットの円形のロンデル広場⁵²

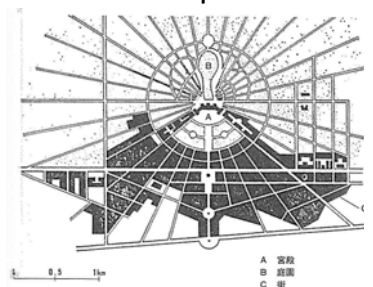


図 11 カールスルーエ⁵³



図 12 18 世紀の王宮⁵⁴

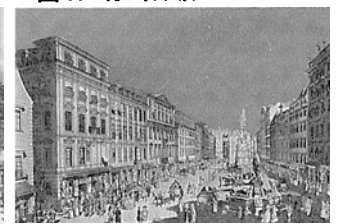


図 13 グラーベン通り (1781 年) ⁵⁵

大統領は、首都建設の担当者としてフランス人の技師ランファン⁵⁶らを任命した。ランファンは 1791 年に現地に着し、半年ほどで計画案を仕上げた。ランファンの計画は、幅 400 フィート（約 122m）、長さが約 1 マイル（約 1.6km）の細長い街区をポトマック川に繋がるように東西に配置して、その東端の丘の上に連邦議会を置いた（現在のナショナル・モール）。

市街地は南北と東西の格子状の道路を基本としているが、街区の幅（東西）はリズムカルに変化させている。また、格子状道路に対角線方向の放射状道路を加えた。格子状道路と放射状道路が交差する場所には円形あるいは方形の広場を設けている（図 14）。

アメリカの都市計画の誕生を分析したピーターソンは、ランファンのワシントン計画を「新しい共和国の王党派様式とヨーロッパのバロック様式の趣向」⁵⁷と述べ、ヨーロッパのバロック様式との関連を示唆している。

ランファンの計画は、母国フランスのバロック都市計画、とりわけヴェルサイユ宮殿および庭園からの影響が強いと思われる。ヴェルサイユ宮殿の竣工は 1682 年であるが、その後も改修が繰り返され、ルイ 15 世の治世下の 1734 - 41 年には、ヴェルサイユ庭園にネプチューンの泉が造営され、1753 - 70 年にはオペラ座が建造されている。ランファンは青年時代をパリで過ごし、ヴェルサイユ宮殿には親しみを持っていたことが推測される。

1901 年、マクミラン⁵⁸は首都の中心部「ナショナルモール」の全面的に改修する計画を策定した（図 15）。ヨーロッパに視察団を派遣し、最先端のシビックデザインの要素を取り入れている。フランスのヴェルサイユ宮殿のバロック庭園も視察され、十字の軸の交差や、放射状の園路、十字形の反射池などが計画に取り入れられた⁵⁹。

(2) 英領ビルマ・ラングーン

19 世紀中ごろ、第二次英緬戦争によってビルマの支配を手にしたイギリスにとって、最初の仕事はラングーンの建設であった。ラングーン建設は、イギリス帝国傘下のベンガル工兵隊に所属するフレイザー中尉⁶⁰に託されることとなった⁶¹。フレイザーは何度か計画の改定を行い、最終的に承認された計画では、市街地の東側にあったスーレ・パゴダを都市計画の主軸として、広い幹線道路をスーレ・パゴダに合わせるように軸を動かした。スーレ・パゴダの周辺は道路がパゴダを迂回し、あたかも道の中心に広場があって、その真ん中にパゴダの金の塔が屹立する。スーレ・パゴダの前の道路は幅員が 200 フィート（約 60m）と他の道路よりも一層広く、都市の中心性を体現している（図 15）。

(3) 英領インド・ニューデリー

1911 年、イギリス国王ジョージ 5 世は英領インドの

首都をデリーへ遷都すること宣言し、そば計画策定はイギリス人のラッチェンス⁶²に委ねられた。ラッチェンスらは新首都をデリーの市街地の南約 5km 程の場所に決定し、ここに新たな首都のプランを描いた。

大統領官邸とインド門をつなぐ全長約 4km のラージパト（王の道）と呼ばれる大通りが造られたが、その設計にはパリのシャンゼリゼ大通りが意識された。さらに商業中心地コンノートプレイスが計画された（図 17）。

ニューデリーの建設は第一次世界大戦後に開始された。インド総督府（現在のインド大統領官邸）およびインド門はラッチェンスの設計による。インド門にはパリの凱旋門との対比が感じられる。

(4) 仏領インドシナ・プノンペン

カンボジアの首都プノンペンは 19 世紀中ごろまではメコン川に沿った小さな集落であったが、1883 年にフランスの保護国になって以降、人口が増加し、フランス人の建築家エブラール⁶³がプノンペン計画を 1925 年に策定した。

この都市を見下ろすワット・プノムの丘の南側には運河が掘られていたが、これと軸線を合わせるように、新しい鉄道駅が建設された。この運河は後に埋め立てられ、中央に広い緑地をもつ東西のブルーバール（現 108 通り）へと変貌した。また、市街地の南のはずれに、もう一本新たな大通りが計画され、さらに市街地の西側に新たな大区画が計画され、その中心には、のちにエブラール自らが設計を担当するグランド・マーケットと呼ばれる市場が建造される。さらに市街地から南西に向かって新たな大通りが格子状の道路を斜行するように走る（図 18）⁶⁴。



図 14 ランファンのワシントン計画図 (1792 年) ⁵⁶

凡例 ①公共埠頭 ②税関 ③ゴドウィン埠頭 ④スーレ・パゴダ ⑤貯水池



図 15 ナショナルモール地区に対するマクミラン計画 (1901 年) ⁵⁷

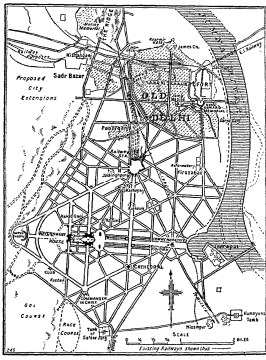


図 17 ランチェンスのニュー
デリー計画 (1913 年) ⁶⁸



図 18 エボールのプランペン
計画⁶⁹

5 バロック都市計画の植民都市への展開プロセス

本章では、バロックの誕生と、宗主国を通じた海外植民地への適用について、時代背景や構成要素を分析することにより考察する。

(1) バロック都市計画の誕生

バロック都市計画の誕生は、第 4 章で概観したように教皇シクストゥス 5 世のローマ改造に源流をみることができる。さらにそれを印象的に展開したのがベルニーニによるサン・ピエトロ広場 (1665～67 年) であった。そのころパリのルーブル宮の改造に取り組んでいたフランスの建築家・都市計画家たちは、バロック都市計画の勇壮な空間構成法を、絶対王政下におけるパリの都市計画に応用し、シャンゼリゼ大通りの造成や、エトワールの凱旋門の建設など、都市軸を貫通させた。

バロック都市計画の手法は、ベルリンの拡張に伴って造成されたフリードリヒシュタットの開発において、広大なウンター・デン・リンデン大通りを敷設し、あるいは幾何学的な形の広場を造成したことなどに見られる。ウィーンでもグラーベン通りのペスト記念塔やハプスブルク王宮地区の空間構成にも適用された。

ロンドンでは 1666 年の大火後の再建計画においてレンがバロック都市計画を応用した計画を提示しているが、複雑な土地所有などから実現にいたらなかった。このため、イギリスにおけるバロック都市計画は 19 世紀のリージェント街やトラファルガー広場の建設までまたなければならない。

こうしてバロック都市計画は 17、18 世紀のイタリア、フランスで確立され、18、19 世紀のドイツ、オーストリア、イギリスなどの諸国で展開されたと考えられる。

(2) バロック都市計画の方法

バロック都市計画について日端⁷⁰は、「都市計画の世界史」の中で、その構成要素を整理し、「①都市軸、②焦点 (ノード)、③多焦点放射状パターン、④ブルーバールなどであり、その原理は⑤遠近法的景観 (長いヴィ

スタ) と絵画的な美観、⑥幾何学的造形の応用である」⁷¹としている。構成要素のうち、①都市軸と④ブルーバールは多くの事例において重なっており、ほぼ同一の概念と考えられる。また②焦点 (ノード) とは、建築やオベリスク、噴水、彫刻などのシンボル性の高いもので焦点 (ノード) を強調することと捉える。したがって、ここではバロック都市計画の構成要素を下記に集約する。

- ① 都市軸・ブルーバール
- ② 焦点 (ノード) の強調 (建物、彫刻など)
- ③ 多焦点放射状パターン

(3) 海外植民地の都市建設

ヨーロッパ諸国による海外植民地の支配は 15 世紀末から 20 世紀中ごろまでの 400 年あまりに渡り、植民地の主体である宗主国も主な国だけでもポルトガル、スペイン、オランダ、フランス、イギリス等があげられる。その範囲もアジア、アフリカ、南北アメリカ、オセアニアと広域に渡る。植民地における都市建設の動向を時代別に整理した (表 1)。

バロック都市計画の展開期が 18、19 世紀であることから、海外植民地におけるバロック都市計画の適用例は、時代からみてイギリスとフランス植民地に限らる。この点は第 5 章でみた事例でも確認された。スペインやオランダの植民地では、バロック都市計画以前の計画概念であった格子状の道路網による市街地形成が多く見られる。

表 1 海外植民地の展開と代表的な植民都市

宗主国	世紀					(アジア) (アフリカ) 代表的な植民都市 (アメリカ)
	16	17	18	19	20	
ポルトガル	■	■				ゴア、マカオ モザンビーク、モンバサ サルバドル・ダ・バイア
スペイン	■	■	■			マニラ メキシコシティ、リマ、サンタフェ (ボゴタ)、 ブエノスアイレス
オランダ		■	■	■		バタビア (ジャカルタ) ケープタウン ニューアムステルダム (ニューヨーク)
フランス		■	■	■	■	プランペン、サイゴン (ホーチミン) ラバト、フェズ、アルジェ ニューオリズ
イギリス		■	■	■	■	カルカッタ、シンガポール、ラングーン ナイロビ フィラデルフィア、サバノ、キングストン
アメリカ合衆国			■	■	■	ワシントン DC、ニューヨーク、シカゴ

出典：筆者

(4) 海外植民地のバロック都市計画

第 5 章で、バロック都市計画の海外植民地への適用事例として、ワシントン DC (英領、アメリカ合衆国独立後)、英領ビルマ・ラングーン、英領インド・ニューデリー、仏領インドシナ・プランペンの 4 都市が検討された。上記 (2) で整理したバロック都市計画の構成要素をこれらの都市について適用状況を整理した (表 2)。ここに見られるように、4 つの事例都市はいずれもバロック都市計画の 3 要素のうち 2 つ以上が適用されていた。特にイギリス領の植民地に適用例が多いが、これは本

国において、複雑な土地所有などの条件によって必ずしもバロック都市計画が思い通りに進められなかった、という歴史的な背景があると思われる。

またバロック都市計画が適用された4都市はいずれも新首都であり、バロック都市計画が人々の感覚に働きかけることから、威厳を醸す荘重な都市空間形成の手法として好まれたものと思われる。

表2 海外植民地の展開と代表的な植民都市

バロック都市計画の要	ワシントンDC	英領ビルマ・ラングーン	英領インド・ニューデリー	仏領インドシナ・フノンペン
①都市軸・ブルバール	✓ ナショナルモータル地区	✓ スーレバゴダ通り	✓ ラージバト(王の道)	✓ フノンペン駅からメコン川に至る大通り
② 焦点(ノード)の強調(建物、彫刻など)	✓ ワシントン記念塔	✓ スーレバゴ	✓ インド門と総督府(現大統領府)	✓ グランド・マーケット
③多焦点放射状パターン	✓ 放射状道路と広場を組み合わせた街路計画		✓ 放射状道路と広場を組み合わせた街路計画	✓ シャルルド・ゴール通り

出典：筆者

6 おわりに

本研究では、ヨーロッパ列強によるアジア・アメリカの海外植民地の代表的な首都である4都市について、バロック都市計画の3つの構成要素を分析した結果、バロック都市計画の要素を強くもつことが認められた。このことは、ヨーロッパにおいて誕生したバロック都市計画が、まずはヨーロッパの国々において普及・展開したのち、ヨーロッパ諸国の海外植民地における都市建設において適用されたことを意味するものである。

このことは、植民地の都市計画のプランナーが宗主国の出身者であったり、本国での都市計画思潮に影響をうけているなどの要因と関連づけることができよう。

本研究により、海外の植民都市における都市計画が宗主国における都市計画の動向と一定の連動をもっていることが明らかになった。このことは、今後、海外植民地の都市計画の特性や手法を包括的に議論する上で、有益なベースとなる。

補注および参考文献

¹ V.R. タビエ (高階秀爾他訳)、バロック芸術、白水社クセジュ文庫、1962年。P8。
² タビエ前掲書、P9。
³ タビエ前掲書、P10。
⁴ 陣内秀信、歩いてみつけたイタリア都市のバロック感覚、小学館、2000年。P120。
⁵ 松岡正剛、千夜千冊「石鍋真澄『ベルニーニ』」、第1034夜、2005年5月11日。
⁶ タビエ、前掲書、P27、38。
⁷ タビエ、前掲書、P70。
⁸ ルイス・マンフォード (生田勉訳)、「都市の文化」、鹿島出版会、1974年、P77。
⁹ マンフォード、前掲書、P78。
¹⁰ 陣内、前掲書、P120。
¹¹ マンフォード、前掲書、P78、125。
¹² 日端、前掲書、P160。
¹³ 永松は、フランス革命勃発(1789年)から第一次大戦終戦(1918年)までの時代をブレ・モダンと呼び、その時代に行われたパリ、ベルリン、ウィーン、ロンドン、東京などの都市計画を「ブレ・モダンの都市改造」と呼んでいる。松永栄、図説都市と建築の近代—ブレ・モダニズムの都市改造、学芸出版社、2008。
¹⁴ シクストゥス5世(Sixtus V、1520-1590)は、16世紀後半のローマ教皇(在位：1585年-1590年)。教皇領の治安回復、ローマ教皇庁の財政再建に傾注し、都市ローマを整備した。
¹⁵ オベリスク(obelisk)は、古代エジプトで制作され、神殿などに立てられた石造の記念碑(モニュメント)の一種。近代および現代においては欧米の主要都市

の中央広場などにも建設された。
¹⁶ ドメニコ・フォンタナ (Domenico Fontana、1543-1607)はルネッサンス期の技術者。
¹⁷ 河辺泰宏、図説ローマ「永遠の都」都市と建築の2000年、2001年、河出書房新社、P106-107。
¹⁸ 河島英昭、ローマ散策、岩波新書、2000年、P94。
¹⁹ カルロ・ライナルディ (Carlo Rainaldi、1611-91)。ローマ出身のバロック期の建築家。ポポロ広場の双子の教会、サンタ・マリア・デイ・ミラコリ教会とサンタ・マリア・イン・モンテサント教会、サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂の後陣側のファサードを手がけている。
²⁰ 河辺、前掲書、PP114-115。
²¹ ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ (Gian Lorenzo Bernini、1598-1680)は、バロックの時期を代表するイタリアの彫刻家、建築家、画家。
²² 陣内、前掲書、P10。
²³ 陣内、前掲書、P32-99。
²⁴ Map of northern Rome, Piazza del Popolo, by Nolli 1756。
²⁵ 日端前掲書、P193。
²⁶ ルイ14世 (Louis XIV、在位：1643-1715年)。ブルボン朝第3代のフランス国王。絶対君主制を確立した。
²⁷ ル・ヴォー (Louis Le Vau、1612-1670)はフランスの建築家。ルイ14世に仕えた。
²⁸ クロード・ペロー (Claude Perrault、1613-1688)は17世紀のフランスの学者、建築家。
²⁹ アンドレ・ル・ノートル (André Le Nôtre、1613-1700)はフランスの造園家。
³⁰ 三宅理一、パリのグランド・デザイン、中公新書、2010年。
³¹ アンジュ・ジャック・ガブリエル (Ange-Jacques Gabriel、1698-1782)は18世紀に活躍したフランスの建築家。
³² 本名アベル＝フランソワ・ポワソン・ド・ヴァンディエール (Abel-François Poisson de Vandières、1727-1781)は、18世紀フランスで活動した貴族。のちに父の領地を相続し、マリニー侯爵 (marquis de Marigny) となった。
³³ 旧軍用地を再開発した副都心地区。グランドアルシュなどを擁する。
³⁴ ナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte、1769-1821)は、フランスの軍人・政治家。ナポレオン1世 (在位：1804-1814、1815年)としてフランス第一帝政の皇帝にも即位した。
³⁵ 日端前掲書に加筆 (ブラウンフェルス (日一郎訳)、西洋の都市より)。
³⁶ 日端前掲書、P198、一部筆者が加筆。
³⁷ André Le Nôtre, Plan of Palace of Versailles, 1661-1668, constructed in 1662-1690。
³⁸ Google Earth。
³⁹ クリストファー・レン (Christopher Wren、1632-1723)はイギリスの建築家、天文学者。イギリス王室の建築家。
⁴⁰ 見市前掲書。
⁴¹ ジョン・ナッシュ (John Nash、1752-1835)は19世紀初頭に活躍したイギリスの建築家。都市計画家。
⁴² チャールズ・バリー (Sir Charles Barry、1795-1860)は19世紀イギリスの建築家。ウェストミンスター再建で知られる。
⁴³ クリストファー・ヒバート著 (横山徳爾訳)、「ロンドン—ある都市の伝記」、朝日選書、1997年。PP224-225。
⁴⁴ 杉本俊多、ベルリン、講談社現代新書、1993年。P114。
⁴⁵ 日端、前掲書、P171。
⁴⁶ ヒンデブラント (Johann Lukas von Hildebrandt、1668-1745)はオーストリア・バロック建築家、技師。
⁴⁷ フォン・エルラッハ (Johann Bernhard Fischer von Erlach、1656-1723)はオーストリアの建築家、彫刻家であり建築史家。
⁴⁸ 山田耕治、ヨーロッパ諸国の海外植民地における都市計画の展開についての研究、土木学会土木史研究講演集 (Vol. 34、2014年)、Pp33-40。
⁴⁹ 見市雅俊、ロンドン=炎が生んだ世界都市、講談社選書メチエ、1999年。
⁵⁰ J. Stridebeck, LindenAllee 1691
⁵¹ 杉本、前掲書、P115。
⁵² 杉本、前掲書、P115。
⁵³ 日端、前掲書、P172。
⁵⁴ 森本、前掲書、P274。
⁵⁵ 上田浩二、ウィーン—「よきもの」がつくった都市、筑摩新書、1997年。P115。
⁵⁶ ピエール・ランファン (P. L'Enfant、1754-1825年)は、アメリカ合衆国で活躍したフランス人の・建築家・都市計画家。
⁵⁷ J.A. ビーターソン (兼田敏之訳)、アメリカ都市計画の誕生、鹿島出版会、2011年。
⁵⁸ ジェームズ・マクミラン (1838-1902)はミシガン選出の上院議員。
⁵⁹ ビーターソン前掲書、P118-119。
⁶⁰ アレクサンダー・フレイザー (Lt. Alexander Fraser、1824-1898)はスコットランド生まれ、ベンガル工兵隊に中尉で入隊、後に将軍となった。
⁶¹ 山田耕治、ミャンマー国ヤンゴン (旧名ラングーン)の英領時代の都市計画の源流についての研究、土木学会土木史研究講演集 (Vol. 33、2013年)。
⁶² エドウィン・ラッチェンス (Edwin Lutyens、1869-1944)、20世紀始めに活動したイギリスの建築家。
⁶³ エルンスト・エブラール (Ernest Hébrard、1875-1933年)はフランス人都市計画家、建築家。
⁶⁴ Michel Igout, Phnom Penh Then and Now, White Lotus, 1993。
⁶⁵ Plan of the City of Washington, March 1792, Andrew Ellicott, revised from Pierre (Peter) Charles L'Enfant, Thackara & Vallance sc., Philadelphia 1792, Filed in Library of Congress。
⁶⁶ B. P. Pern, A History of Rangoon, American Baptist Mission, Rangoon, 1939に加筆。
⁶⁷ National Capital Planning Commission, Washington, DC, "The McMillan Plan of 1901."
⁶⁸ The Town Planning Review 4 (October 1913):185-187。
⁶⁹ Ministère de la Culture, Phnom Penh - Développement urbain et patrimoine, Paris, 1997。
⁷⁰ 日端、前掲書、P197。
⁷¹ 日端康雄、都市計画の世界史、講談社、2008年、P197。

(2016. 4. 11 受付)